平成 29 年度　第２回仙台市景観総合審議会　議事録

日　　時　　平成 29 年 11 月 16 日（木）　15：30～17：00
会　　場　　仙台市役所本庁舎２階　第５委員会室
出席委員　　杉山 朗子 委員 、髙山 秀樹 委員 、杼窪 昌之 委員、
　　馬場たまき委員 、堀　繁　委員 、宮原 博通 委員、
　　吉川 由美 委員 、涌井 史郎 委員 、渡辺　博　委員
仙 台 市　　都市整備局長 、舩山次長、小野次長、総務課長
事 務 局　　都市整備局計画部都市景観課
そ の 他　　国土交通省東北地方整備局建政部計画管理課
　　宮城県土木部都市計画課

１．開会

司会　・涌井会長の到着が遅れているため、景観法等の施行に関する規則第 30 条２項の規定に基づき、宮原副会長に会長代理を務めていただきます。

宮原副会長　・今回の議事録署名人は、私と、杉山委員にお願いいたします。

２．議事　今後の景観施策のあり方について

宮原副会長　・本日の審議事項は、「今後の景観施策のあり方について」の 1 点となります。前回からの引き続きの議事となり、今回は前回の議論を踏まえ、目標を改めて確認し共有する、今後の検討につなげるため進め方の方針を定めるということですので、次の展開に向けて整理しておくべきこと、検討すべきこと、これらに向けて前回同様にご忌憚のないご意見をいただき、今後につながるものにしたいと考えております。

事務局　（説明）

杉山委員　・お手元に、資料を配布させていただいております。以前に山形の東北芸術工科大学で、大震災の後、景観や色などが皆さんの記憶の中にどのようにあるのかを学生に聞いたものです。

・右側のほうは、青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島の６県のご出身の方たちの意見を取りまとめたものです。ざっと見ていただいても自然や環境など、それこそ「杜の都」の杜みたいなことが随分上がってくることがわかってまいります。

・山形と仙台で差があることもわかりました。どちらも自然に対して自分たちを育ててくれたという考えが強くなっておりますが、山形は山や空、

川、耕作地といった答えが多く、仙台は並木・公園・庭といったところが多いのが特徴でした。自然の風景というよりは、定禅寺通を初めとした並木、住宅街の普通の家の庭などを語っている方が多かったです。仙台の恵まれた住宅地が影響を及ぼしたこととも思ったのですが、身近な緑をすごく大切に感じているということがわかりました。

・建造物は全体に割と低めですが、仙台では関心が高く、３番目ぐらいになっています。あと、店舗・商店街が上がってくるのは、ほかの街にはあまりない傾向です。やはり東北６県の中では若者たちは買い物といえば仙台というようなことがあるので、仙台は全国の中でもすばらしい商店街を抱えているわけで、そういったところに対しても強い関心がございました。

・それから、文化・風俗といったところにも仙台では特徴が見られます。やはり光のページェント、ジャズフェス、七夕などは「非常に心弾む」、「残していきたい」、そして「自分も参加したい」というような声が多かったです。

・自由記述は少人数でしたが、「杜の都」といった中に先ほどの商店街や光のページェントなどのイベントなどへの関心があることがわかりました。

・今回の景観を考えるといったときに商業的な面、イベント的な面、それから家の庭というような個人でも参加できるような面についても仙台市の１つの誇りというように思われていることがわかります。簡単なアンケートですが参考にしていただければと思います。大体皆さんのお考えと同じだったかと思いますので、それを支援するデータという形でご理解いただければと思っております。

宮原副会長　・今後の景観を考える上で、このような側面的なこれらのデータを踏まえて、ということもいいのかと思います。

堀副会長　・今日の我々に課せられたのは、１つは事務局が整理をしやすいようにこの目標について意見を出すということです。もう１つは今後の進め方についていろいろと具体的な目指すことを議論することだと思います。

・最初の目標の話ですが、資料に目標が３つあります。本当であれば都市というのは非常に複雑ですからものすごくたくさんあって、それを３つにすると、つまり切り捨てる部分がたくさんあり、そこの部分が大事か大事でないかということがあります。

・目標の中でベースにあるのが「杜の都」ということですが、それ自体も

ちろん間違いではないし大事なことですが、目標設定というのは、目標に向かうための手法とセットで考える必要があります。

・そのように考えますと、「杜の都」を強調するあまり、緑地保全計画と緑化計画で足りそうだなと聞こえます。景観という言葉がほとんど語られずに、場所や空間、スペースをどのようにするかという話ばかりです。

・景観が緑やスペース、物と決定的に違うのは、そういうものを人間の側がどのように捉えているかということです。スペースの話であれは、それは景観ではないので、緑地保全計画で機能するのです。

・時間の関係で十分な説明ができないのはわかりますが、その抜けたところがまさに今重要になっていて、そこがしっかりして初めて緑というものが本物になって生きてきます。そこをどうするのか、景観総合審議会で練るところだと思うのです。

・目標設定が、都市のアイデンティティーの創出、地区の個性の表出、市民の身近な景観の演出で、言葉足らずで、それ以外のものをみんな切り捨ててしまっているような危惧がこの目標にあるのかなと思ってお話を伺っていました。もう少し大事なキーワードを入れるなどの議論が必要で、例えば地域の活性化、世界一の環境都市、商店街の形成など、そのようなものもたくさんあるのです。

宮原副会長　・目標の表現というのは、ここに３つあるわけです。都市のアイデンティティーの創出と言ったときに、都市のエネルギーを生み出す上ではどのようにつながるのか。経済環境や、生活環境、環境づくりはこういうことと表現すべく、この目標１、２、３、それぞれに対してどういうことで、どこにどのようにつながるという、その辺の表現を、この目標のもう一段階掘り下げた言葉をあわせて見ていく必要があるということではないでしょうか。

堀副会長　・以前にも何度かお話ししていますが、景観計画、景観施策というのは大きく２つに分けて整理されます。１つはマイナスの軽減や大きなマイナスの未然防止です。悪いことが起こらないようにしましょう、緑がすごく豊かなのでこれを大事にしましょうという、言葉を変えて言うと、マイナスになるようなことをやめましょうということです。

・しかし、都市というのはマイナスを生み出さないよう、マイナスを未然防止しましょうというだけでは、やはりエネルギー、パワーを落としていってしまいますので、プラスの付加ということが非常に重要だと思います。我々が持っている手法をいろいろ考えると、やはりプラスの付加

というところをもう少し打ち出さないと、だめと言うことばかりになりかねないと思うのです。

宮原副会長　・一面、大事なことかもしれませんが、生活環境と経済環境という面で言えば、企業としてここに住むこと、仙台に企業の立地を構えるという意味を考えているというような、景観と企業と人との付き合い方、そして、街ぐるみで取り組んでいるというそのエネルギー、それを結び付けていく。生活環境にしても子供から大人まで「ここに暮らしていて私たちはいいことを学んでいる。」、仙台市の都市景観というものが身近にあり、そこから多くを学び、いろいろなものに反映されている文化というような環境にいる。つまりそれらをどのように共有するか、ということなのかと思います。

涌井会長　・景観というものは改めて申すまでもないのですが、決して美容学の領域ではないのです。美しさというのは何かというと、内発的な、健康で本当に輝いているということが１つ本質ではないかと思います。

・現在、世の中が非常にダイナミックに変わっている中で、仙台が自ずと、あるいは他動的に、東北州というものを想定し、州都仙台の品格や、あるいは未来に目指すべきもの、その産業に効果たらしめる景観という未来的な思考、そして伝統も重要だという視点、その延長線に仙台の景観を考えるべきだと思います。

・そういうときに、仙台としての景観をどのように考えるのか、その景観の最低部を時間をかけて委員の方もしっかり話をすることは極めて重要ではないかと思いますし、堀委員がおっしゃったことも同感です。景観はやがてそれで一本化していれば風景になりますし、風景も時間がたっていくと歴史になって風土になっていくのです。

・風土と風景と景観の文脈というのは、断ち切ることはできないのですが、絶えず現在、現代に生きている我々は未来に対してどのような作図をして、それで風土と矛盾しないのかという、そういう１つのコンセプトで考える必要があると思っています。改めてここで仙台市における景観とは何かという１つの定義を皆さんで議論していただくことが極めて大事なのではないかという気がいたします。

渡辺委員　・仙台の景観は、こういうところは今までどおりで大事にしていっていいよね、これを守りながら、こういうところもあるよね、足りているのかな、ないのではないのかという姿勢が必要ではないかと私は思っており

ます。

・それは歴史をどのように現代に表出するかということですが、「杜の都」は屋敷林という歴史があってケヤキ並木があって、緑がたくさんありますよという流れだと認識していますが、そもそも仙台というのは仙台藩を統治した伊達家がつくり上げてきた街で、歴史があります。それは街並みであったりしたわけですが、戦争で焼けて灰燼になりました。しかし、戦災を受けなかった地区ではかろうじて昔の町屋がきれいに再現されているということがございます。

・なくなってしまったものをレプリカ的に再現するということはなかなか難しく、仙台市ができることは限りがあります。仙台の歴史というものを現代風につくり上げていくかということで、都市整備局には頑張っていただかなければならないと思っております。

・今、関係局とお話をしているのは、大町の交番がありますが、そこから大橋に向かって下りていきまして、仙台城址につながりますあの沿道、大橋の正面に整備された街灯に九曜紋のフラッグがあります。今、ほつれて、色が抜けているような状態ですが、仙台の歴史をフラッグというたった１つのことで表しています。

・仙台駅前に立ったときに緑がいっぱいで、近代的で美しい街というのは定着しましたが、400 年の歴史を持つ街、これが足りないと思っておりまして、仙台の魅力をさらに伸ばしていく、歴史的な面で伸ばしていく大事な要素だと思っております。

・そのフラッグを仙台駅前まで延ばす提案をしていまして、このフラッグを辿っていくと仙台城址にたどり着きますよと、到着するまでに仙台の近代性、美しい街並みと緑を感じて、歴史の本拠地にたどり着く。街灯を１つ工夫することによって、仙台の歴史を感じていただいて、仙台に関心を持っていただくことになるのだろうということです。

・これは景観総合審議会の仕事ではありませんが、400 年の歴史、それを念頭に置いた景観というものができないか。こんなことを考えていく必要があるのだろうと思っておりまして、仙台の歴史に基づいた街をどのように再現していくか。

・資料にありますが、シビックプライド、市民のアイデンティティーもまた１つのよりどころという、それがこれからの課題ではないか、そこに景観総合審議会がどのように関わるのかと思っております。

宮原副会長　・進め方を考えていくときに、歴史という１つの重要な切り口であります。何か関わりを持ち意識を醸成していく上で歴史は重要なキーワードかと

思います。

吉川委員　・先日、仙台市の文化のプロジェクトで仙台ナンダ札というボードゲームをしながらアイデンティティーについて考えました。その中でいろいろな意見が出てきました。広瀬川の景観、河岸段丘の土地というものが仙台市の景観をつくる上での大きな要素ですが、今もその川沿いの崖に、かつて青葉城の一部がつきだしていたことを想像できます。その崖には亜炭抗の跡があり、流域には公園があり、その向こうにビル街がある。その都市景観の中で、川の護岸がコンクリートで固められずに自然がむき出しのままになっているというのは非常に珍しいというご意見がありました。

・大自然の長い歴史があり、400 年前はただの荒れ地だったところに、町ができて、歴史的な遺構がその自然景観の中に存在している。

・ＮＨＫの番組でも河岸段丘の土地にどのように用水が巡っているかとか、地下水がどのように流れているか、そういったことも改めてあのように発掘されて、仙台生まれの仙台育ちの私も知らないことがたくさんあることがわかりました。地形がこれほど景観というものに資するものなのだということを改めて感じています。

・しかし、残念ながらここに「屋敷林から並木へ」とあるように、もともとの景観はなくなってしまったと定義づけられているのかと思って、そこが私自身には納得いかないなと思っています。

・今日も広瀬川河畔から歩いて来ましたが知事公館があるところもすごく屋敷林が残っていて、モミジがきれいで、秋になればハギが咲きます。まさに河岸段丘の地形の中を歩いてきたときに、まだまだ城下町らしい景観というのは残っていますし、あるいは立町、通町までの屋敷の町割りとか、建物は影も形もないですが、屋敷の割り方は当時のまま、多分仙台藩が最初に行った形が残っています。

・このような見方を市民に少し与えるだけで街の見え方が景観として全然変わって見えてきます。もともと持っている仙台というものが何なのかということに対しての可視化する努力が全くなされないままに、並木で「杜の都」をやっていくのだというのはあまりにも慢心し過ぎるかなという、残念な感じがしています。

・この街をつくった人たちの知恵とか、そういうものを十分に感じられる場がまだ残っていますし、そのヒントが今の町割りの中に生きていると思います。歴史的なことだけではないのですが、そこの視点です。河岸段丘を生かしてこの街ができていて、人工的な用水や配水、多分仙台藩

がつくった河口の部分の石垣などが残っています。そういったことも知らない方が多いと思います。

・景観とは別な話になるかもしれませんが、景観として、そういったものを見直すというか、見る視点というものがあれば、もう少し仙台のアイデンティティーを感じるような、自分たちの街の原点というものが何から生まれてきているのかということがわかるのではないかと思います。

・先ほど庭の話がでましたが、昔からの庭は少なくなっていますが、残っているところもあります。前回も申し上げましたが、庭木が大きくなって、伐採をしなければならなくなることが現実的に起こっています。学校の行き帰りに見る木、遊んでいる公園の木など、木と人との接点を持った生活、そういったものをもう少しみんなで共有していくことが必要ではないかと思います。

・「杜の都」でいこうと言っても街路樹だけでは貧しくて、市民の関わりをつくるためには自分の生活の中で自分が関わっている木があるということ、100 万市民がそれぞれ思い入れの木があるということ、１つの景観の中に木があるというのが仙台の景観だなという意識づくりにもつながるのかなと思います。これは何かの事業になるかもしれませんが、100 万市民がみんな自分の木を持っているとか、何かそういうプロセスをつくっていくことも大事なのではないかと思います。

宮原副会長　・暮らしの中で意識している木、それが生活の中でいろいろな形で重なっているという、そのような意識を醸成していくということも大事だろうと思います。

・景観という言葉が、ここで例えば基本目標で「杜の都のアイデンティティーを高める景観形成」とあるわけですが、きちんと定義をしていくということが必要だと思います。仙台市が言う景観というのはこういう意味なのかという、景観の定義ということが例えばこの資料の中でもそれを確認する言葉があっていいのかと思います。

・仙台市における景観というのはこういうことですという、それを明確にする必要があると思います。

涌井会長　・意見の中でなるほどと思うところがありまして、ただ、気をつけなければいけないのはどこが最適解か、ということです。全体解というのは必ずしもイコールではないということです。

・それはゾーニング的な考え方の中で、この地区は歴史的な地域、この地区は新市街地あるいは商業地域とかいう、そういうものではなくて、

400 年の歴史を重ねてきた都市というのはレイヤーで考える必要があると思います。

・いわゆる自然の要因というものに導かれて都市が形成されてきた。それから、仙台という都市が形成される以前の原風景があります。そこに築城がなされて、やがてそれが今度は明治維新になって、戦災にあって、また現在復興して今日に至っている。

・仙台というのは幾つもの層が積み重なっているわけです。その重なりの中で、意図的にというよりは、歴史や時間が重なっているわけですが、それを整理しながら仙台全体のイメージがどのようにできているのか、これから仙台が担わなければいけない国際的な都市間競争の中で存在感、レゾンデートル（自身が信じる存在価値）を主張できるかというところが一番重要で、これに負ければ自ずと仙台も後退をしていかざるを得ない。

・世界の都市の中でニューヨークが１位、２位がロンドン、３位がパリ、４位が東京、５位がシンガポール。これが定石だったのです。ところが、ロンドンオリンピックが開催された後に１位がロンドン、２位ニューヨーク、３位パリ、４位が東京になりました。

・ところが、パリでテロが起きた途端に、１位ロンドン、２位ニューヨーク、３位東京、４位パリ、５位シンガポールになりました。

・つまり、そういう中で何が起きているかというと、実は海外からの投資や、それからヘッドクォーター（本社）とそのエリアの指令的な要素をやる法人の支社がいる。本社の所在地がどこになるのかとか、非常に競い合うわけです。

・日本が今非常に警戒しているのは、東京がシンガポールに取って代わられるのではないかということです。でも、地方都市を見ていくと、地方都市の磨き上げというのはまだ足りていないものですから、世界の 300 ぐらいの都市のそういう評価の中で出てこない。

・そうしたときに、さっき申し上げたように、やはり日本の持っているものは歴史という時間軸の長さが、重心的な長さがあるということ。

・フィレンツェの街が駅に降りた途端にフィレンツェらしいねということになっている。ヨーロッパの街がそうなっているのかというと、決してそうではない。そこには非常に多様な都市の姿というものがあって、そこにダイナミズムを感じながら、歩いて行くと中核には大変な歴史的なルネッサンスを感じさせる街がある。

・これが都市のおもしろさというところで、それが矛盾していないようにでき上がっているというのは、上手に先ほど申し上げたそれぞれのレイ

ヤーを上手に重ねているというところにあると思います。

・仙台もどちらかといえばそういう考え方でものを考えていく必要があるし、その原点は何かといったら宮原委員がおっしゃったように、仙台の景観をどのように定義していくのかということにかかってくるのではないか、そのような気がしております。

杼窪委員　・仙台というと、個人的なイメージは旧仙台でして、今の荒井とか新しいイメージとかというのはもう景観としてはある程度計画されてできている部分があるのでしょうが、先ほど東北大学の例を出しましたとおり、東北大学の先生方というのはそれなりに勉強しているので、その意見というのは非常に大事なような気がします。

・そういうものを利用するのと、東北はインバウンドの外国人は少ないですが、定住する外国人はいらっしゃるので、ご意見も聞くと、それは参考になると思います。

・それと堀委員のおっしゃるように、緑化保全というのは大事ですが、それだけではいけないということを考えれば、例えば国分町は看板だらけにするとか、広告だらけにする。その脇には高層ビルが建っている。そのような視点も持ちたいと思います。

堀副会長　（スクリーンに写真を表示）

・涌井会長が言われたように、仙台は世界の一流の国際都市という意識をぜひ強く持ってもらいたいと思いますし、そうなるべきだと思います。

・世界の一流都市を見ますと、この映像がローマです。建物、街並みはもう全然かなわないのです。

・これはブリュッセルで、有名なグランプラス。我々が行けばびっくり驚いて帰ってくる。１つすごいのは、エンターテインメント性、人を重視しているのです。人を楽しませるという意識がとても強いです。

・建物、街はかなわないです。でも、人をもてなすという、これは日本の得意技なので、だから緑というのはよくわかるのですが、そんなことを言っていても世界の都市にならないのです。

・ここの広場は、市民から観光客までみんな座って酒盛りできるようにして、人を楽しませるという意識が強いのです。

・これはウィーンです。どこもみんな人が中心なのです。

・最も重要な点は、そういう物、建物とか緑とかと人間との関係を考えることです。もちろん人間が歩いたときに満足すればハッピーになるというところが最も景観の大切なところなので、緑を守りますというのはち

ょっと不十分なので、そこをぜひ一歩踏み込んで考えていっていただきたいなと思うのです。

・これはブダペストです。単に食べ物があるだけではなくて、それを演出して楽しませたいという意識が非常に強いです。歴史というのは先人がつくったのですが、それをどのように財産・魅力にしていくかというのは今の人たちがやる。そこのところにもう少し思いを馳せてもらいたいなと思います。

・これはプラハです。歴史的なものがあると同時に、空間をやはり人間の側に引き寄せて、人間を楽しませるというのが極めて強いです。

・フィレンツェです。ドームを見ながら食事ができて、休めて、お茶が飲めて「楽しいな。いいところに来たね。また来たいね」と会話が弾む。そういうものはやはり目標には当然なるべきかなと思います。

・ミラノです。これがドームの大聖堂の前の広場で、もう毎晩のようにエンターテインメントです。

・リスボンです。大聖堂です。ガレリアです。やはりライトアップって人を楽しませる以外何の目的もない。このぐらい人のことを意識しているということです。

・パリです。エッフェル塔のシャンパンフラッシュ。あれは本当に人を集めます。

・これは街路樹です。これは目標にならないのではないですか。つまり街路樹をやりますというのは何も言ったことにならないのです。周りに緑があるということが重要です。まさに人間からするとそのクオリティー、本気で私を満足させようとしているという、そこの部分がないと何も決めたことにならないのです。

・「仙台の街路樹は全部こういうふうに 50 年後にしますよ」というものは目標ではないのです。本当に緑ということで世界に見てもらう。私はそれは賢明だと思うのです。なぜかというと、世界の街並みに絶対かなわないので、勝てるとしたらもうおっしゃるとおり緑、「杜の都」で打って出る。

・ただ、「人をどうやって緑で楽しませるのか」という、具体的な緑の目標が固まらない限り、先ほどの説明のようなことではうまくいかないと思います。

・これは十和田湖の休屋という集団施設地区です。十和田湖ですから緑が豊かで、整備するときに既存の緑は残しますが、どうですか、行ってみたいと思いますか。

・次は広場です。２つ見てもらいます。これは千葉県の県庁前の広場で、

こちらはフランスバスクの地方都市です。何が違うかわかりますか。人間を意識して、人間を楽しませる、そういうところがあるかないか、なのです。

・これは観光客よりも緑が大事だと言っていますね。観光客のために緑を大事にするという感覚がないといけない。

宮原副会長　・この仙台市を考えるとき、本当に市民の方たちが誇りに思う空間、それが自然に人が空間を共有しているという、そういうシーンがあるのだろうかということを考えていかなければいけないと思います。

・それは外から来た人が「仙台はすばらしいですね。緑がいっぱいですね。でも仙台市民の楽しんでいる姿を余り見かけませんね」と、こうなってしまっては元も子もないわけですし、本当に歴史的なファサードであれ何であれ、そういうものがなければ、何で表現するか。

・何よりも市民がその時間と居心地のよさを共有できる空間があるのかということがこれからの課題になってくると思います。世界中から見て仙台市はすばらしいといったときに、仙台市民が日々その空間で楽しんでいることが必要ですし、もちろん国外からの方も一緒になって楽しめる空間、時、そういうものがあるかということがこれからの街の魅力づくりの大きな尺度になっていくのだろうと思います。

馬場委員　・今回の目標といったところを見たときに、前回も述べたと思いますが、やはり震災に遭ったというようなことが目立つところにも書いていなくて、やはり景観を今後どのようにしていくかといったときに、仙台市の沿岸部はまだまだ復興が途中ですので、仙台市の中心部を国際的に、もちろんそこは意識して、また、被災地の方たちの元気な仙台といったところにも目を向けて景観整備をやっているという、メッセージだったり、来ていただいたりという、そういう場所を多くしていきたいなと思うので、そのあたりの目標が見えてきてほしいというのがあります。

・それから、今イチョウが美しくて、その陰には、朝一番に道路の落ち葉をとっている住民の方たちが、大変な労力で守っていらっしゃいます。

・そういったことを考えても、市民の方への教育といいますか、育んでいくというあたりも景観総合審議会の大きな仕事なのだろうなと思っておりますので、市民の方に参画してもらうというよりも、もう少し歩み寄り、市民の方たちと一緒につくっていくというのがイメージできる目標にならないかと思いました。

髙山委員　・優れた商品とか売れる商品というものを考えたときに、やはりデザインだけではなくて機能性というものが大切だと思います。

・街もそれが当てはまるのではないか、見た目だけ美しい街になっても、そこに機能性が伴わなければ、そこで生活する人も経済も回らないですし、人も企業も寄ってきません。そういった視点も景観を考える中で必要ではないのかと思いました。

・定禅寺通も非常に街並みがきれいで、イベントをやれば人は来ますが、普段はほとんど歩いていないと思います。やはり、そこに機能性とか魅力というものが少ないのだと思うので、経済面でカバーしながらデザインを生かせるような機能性というものを備えていかないと本当の景観、街というものが成り立っていかないのではと考えました。

宮原副会長　・大変大きな括りではありますが、確認をしてから先の議論を展開するという上でも今日の議論は大変重要ですが、まだ議論が足りない部分があるかと思います。

・資料１の今後の進め方で右側に４つ書いてありますが、今日貴重なご意見をいただいた部分も、まだこれを本当につないでいくようなことにもなっていませんし、本質を確認して次の展開に向けていくということも必要だと思います。

・これからの目標の視点の確認や進め方の方針の確認については、議論がスタート地点からちょっと出たのかなというぐらいの感じがします。議論を整理すると、そのスタートラインから少し前に行っているということが確認できるのではないかと思います。

・事務局が今日の意見をまとめて、深く解釈し、資料に照らし合わせて確認していく作業が必要かと思いますし、景観総合審議会としての意見をさらに出して大きな骨格を捉えていくということが必要だろうと、そのように思います。

吉川委員　・資料の中で、今後の進め方で市民意識の調査とかいうことも書いてありますが、市民の人たちと文化のプロジェクトをやって、仙台というのはおもしろくない、楽しくないという若い人がとても多いということに気づかされました。

・心地よく自分たちが主体となって楽しめる場というのが非常に少ないと思っているのではないかと思っていて、別な地方都市と比べると仙台はちょっと冷たい感じ、楽しくない感じです。

・例えば仙台駅前は、駅を出てベンチみたいなものがあって、人がたくさ

ん座っていらっしゃいますが、あそこには座ってみたいとは思いません。多分そう思う人が多いと思います。あとは、一番町にベンチがありますが、座っている人が余りいません。

・どうしたら座るのが楽しくなるのかなど、市民の人たちと一緒に考えるアンケート調査、ヒアリングが必要なのかなと思います。何かこのままの意識調査だと本当に外面的な景観に関する意識調査になってしまわないかなと思うので、市民がいかに景観と楽しくやれるかという方向性で、調査も市民の意識を立ち上げながらの調査になるように要望いたします。

渡辺委員　・涌井先生のレイヤーという考え方、これは非常に仙台に足りない考え方で、これからの街づくりの基本として必要だろうと改めて思いました。

・街の時代の特徴をつくって、つくり直していくかということもぜひこの審議会の中で大事なテーマとして考えていくべきだろうと思いますので、よろしくお願いいたします。

杉山委員　・並木ということが出ましたが、１つ大変プライドの高い文化を持っているわけですから、もっと並木を使うという意識で考えていただいて、仙台ルールということで使い倒すという、皆さんが楽しめるようなルールづくり、法律を変えてもいいのではないかと、もう少し砕いた形で楽しめるような並木を目指していただきたいと思います。

・あと、正直言うと仙台は何回も来ていて、もう行くところがない状態です。私は路地も好きだし、いろいろなところに行っております。私はそういった意味では楽しめますが、きっと観光に来た方だと少ないかと思います。

・レイヤーの１つの考え方に地形マニアとか歴史マニアとか、お買い物好きとか、このために来るというような、人のレイヤーみたいな形も含めて楽しめるものを期待したいです。路地巡りもそうだし、東京での居酒屋特区、京都で増えている立ち飲み、国分町のようなところもそういう目で見直して、話題性を出せるような、そういう街使いというような、人の行動レイヤーみたいなことも考えて、ぜひ世界中から人が集まる街ということを期待したいと思います。

宮原副会長　・仙台は居心地のよい、まどろめる都市空間というものが少ないと思います。だからこそ、こういう部分をもっと生かせたらいいのではないかとか、少しでも人が立ち止まる、少しでも滞留してみたいと思わせる空間づくりというものが実は課題なのかもしれません。

・それでは、委員の皆様からたくさんご意見をいただきました。そして、次の展開に向けて整理しておくべきことですとか検討すべきことを次の審議会に向けまして検討をお願いしたいと思います。

４．閉会

司会　・涌井会長、宮原副会長におかれましては、委員としましては今期までということになります。審議会の参加は今回で最後となりますので、お二人からご挨拶、今後のアドバイスなどをいただきたいと思います。

涌井会長　・やはり我々はあちらこちらに学びながら、街使いということを杉山委員がおっしゃっていただきましたが、私の任期中はどうしても対症療法、それはどういうことかというと、２つの審議会が１つになって、あるいは平成 23 年に東日本大震災が起きてしまったとか、なかなか当面する問題にどのように対応するのか、あるいは景観という議論がそうした緊急事態の中では余り着目されないというような中で、どのように審議会を切り回していくのかというところに少し追われてしまって、本質的な議論のところになかなか行かなかったというのが正直な感想です。

・しかし、スパイラルアップでして、もう１回原点にフィードバックしながら改めて次へ進むという、そういう作業が大事だろうと思います。今まさに何巡目かわかりませんが、もう一度原点に立ち返って仙台の景観を考えるということをしていかないと、都市間競争の中で勝てない可能性があるので、その点を新しい審議会の委員の方や会長、副会長にぜひご一任をして、そうした議論を深めていただければ幸いだなと思います。

・考えてみると、仙台市民はひょっとすると仙台のすばらしいしつらえを使いこなしていないということかもしれません。ぜひ国際的に勝てる未来の仙台という都市を景観というものでしっかりつくって、本質的に仙台が健康美であるということが景観の本質だと思いますので、そういう中で人々が生き生きと仙台という街を舞台に街使いをしていく姿というのが一番望ましいと思います。この景観総合審議会がどのように対応できるのかということについて皆様方にぜひ検討していただきたいということをお願いして、これまでの長い間のご支援に対して心からお礼を申し上げたいと思います。

・同時に、宮原先生、それから堀先生、支えていただいたことにも御礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

宮原副会長　・振り返ってみますと都市景観賞審査会の審査員を仰せつかったのが、19

年前のことになります。そのときに、ジャズフェスが１つの都市のエネルギーをつくっているイベントにほかならないと思い、イベントではありますが、仙台の１つの都市の表情をも伝えていく貴重なものだろうと実感しました。

・定禅寺通の中央のグリーンベルトは、県道でしたから、それを市道に移管して公園にし、いろいろ使えるようになりました。そして、ジャズフェスのステージにし、道路の片側を止めて客席にしようと、警察とのやりとりに３年ぐらいかかりました。

・振り返りますと、都市の景観づくりに今自分は力を注いでいるなと、覚えたことを思い出しますが、ジャズフェスにしましても一瞬でありますが仙台市民、また全国から集まるミュージシャン、みんな仙台のファンになって一堂に会しているというシーンが本当に貴重なものだと思います。

・それがもう少し日常的に仙台の都市空間の中に居心地のいい空間として文化交流できるような、日々イベントも通しながら、本当に人が楽しんでくつろいでいる、そんな空間づくりが必要なのだろうと思います。

・今皆さんにお伝えしたいと思うもう１つのポイントとしては、この景観にしろ、仙台の魅力づくりをいかに市民の方と共有するかということがこれからの課題だろうと思います。

・平たく言えば老若男女、ここに暮らし、仕事をし、本当にここでよかったと誇りに思っているかということも街づくりの景観づくりの視点の判断尺度かなと思います。仙台の誇りづくりということが景観づくりのベースにあるのだろうと思います。

・この景観総合審議会で皆様と意見を交わし、多くを学び、私なりに切磋琢磨の場面であったと思います。心から厚く御礼申し上げます。

・行政の方々にもいろいろな場面で事前の意見交換なり、いろいろな切磋琢磨をさせていただきましたこと、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。